

『大いなる遺産』についての一考察

— Pip の忘恩、その報いと償い —

樋 口 美 香

Pip's Ungratefulness and the Penalty and the Atonement
for it in *Great Expectations*

Mika HIGUCHI

I

Great Expectations (1860 - 61) は語り手 Philip Pirrip が、Pip という通称を持っている自身の若いころを振り返る、一人称体の形式で展開されている。小説中の Pip は7歳から23歳、そしてしばらく時を隔てて34歳として登場する。語り手 Pirrip は中年以降の声音と思われ、全体としてはかなり客観的、距離をおいた視線で過去の自分を見つめている。Pirrip をさいなませる最大の問題は、若いころの自分が家族に対して行った“忘恩”である。突然舞い込んで来た遺産相続の見込み話に有頂天になったため、慈しみ育て、真実の友として接してくれた義兄で鍛冶屋の Joe Gargery を疎み遠ざけたこと、これが表面的にも現れた、Pip を苦しめる自身の非道である。しかし彼の忘恩の罪は、Joe に対してだけではない。最後まで相容れることになかった実姉 Georgiana Maria に対しても同様の罪を犯している。彼は義兄、実姉を核とする家族を否定し、抜け出すことを望み、離れて行くのだ。この自分の罪への応酬として、Pip は若いころからかなり強く結婚を意識しながらも、結局は独身のまま生涯を終える様子である。Pip が結婚相手として考えたり、夢見たりした二人の女性、Bidly、Estella とは望んだようにはなれない。そこには彼の家族に対する忘恩の罪が影を落としていると考えられる。この小論では、その忘恩の報いとしての Bidly との関係、そして償いとしての Estella との関係を考察していきたい。

II

Pip は子供のころから自分は孤児であるという意識を強く持っている。確かに小説冒頭の場面、Pirrip つまり Pip のアイデンティティーの最初のページで、彼は両親と5人の兄の墓場にたたずみ、彼らの生前の様子を空想している。小さく、非力な存在としての自分は、生者のうちというよりは、むしろ死者のうちにいると思っているようである。

Pip が自分を孤児だと思えるようになるには、外部からの要因もあった。姉¹、そして親戚、知人がよってたかって幼い彼を邪魔物扱いしたのだ。‘I was treated as if I had insisted on being born in opposition to the dictates of reason, religion, and morality, and against the dissuading arguments of my best friends.’ (Ch.4, p.54)² Joe は純朴さゆえ、意地の悪い大人たちから Pip を守ってやることは出来なかった。Joe は一見して理想的な善人とし

て描かれているが、あまりにも Pip と対等であろうとし、また周囲の誰をも尊重するばかりに“あるべき”影響を及ぼすことができなかつたと考えられる。Jack P. Rawlins は、“Joe was wrong -- when he allowed Mrs. Joe to destroy Pip's ego”³、と指摘する。黙って皮肉、当てこすりを聞きながら、Pip は家庭内の被害者としての自分を作り上げていき、生きている価値のない者として自らを墓場まで連れて行く。

Georgiana Maria は、頻繁に癩癩を起こして Pip、Joe に怒鳴り、暴力を振るうのだが、この理由について考えてみたい。彼女の癩癩は筋違いの逆恨みに起因している。⁴ 両親が赤ん坊の弟を残して亡くなってしまった、自分一人ならばどうにでも思ったように身の振り方を決められたら、けれども弟がいる。若い女と赤ん坊だけでは暮らしは困難だ。彼女は自分と弟にすぐさま衣食住を提供してくれる人が必要だった。なので、仕方なく貧乏な鍛冶屋の女房になった。しかも周囲からは馬鹿扱いさえされている Joe が相手なのだ。実質のところ、Joe は無学で朴訥ながらも、寛容、誠実、勤勉で、なにより彼女に対し彼なりの深い愛情を持っている。ではあるが、Pip は姉の振る舞いから、暴力だけではなく、鍛冶屋という生業に対する劣等意識の種をも植え込まれるようになる。

Pip は Joe とともにこの癩癩の無抵抗な犠牲者となり、外見上はおとなしく、自分の存在に疑問を持ち、生死の端境をさまよう如く墓地に立ち尽くしている。だが実際には、兄たち5人が夭折しているのに、彼は生きていたのである。ここに、Pip の 根本的な生命力の強さが窺われる。彼はどんなに妨害され、つつかれても生きて行くのである。しかしながら、姉がどうしてそのように彼に対して振る舞うのかは考えたりしない。彼女が義務的な母親代わりとしては十分にその役目を果たしてきてくれているにもかかわらず、彼は姉に肉親らしい情を寄せることはない。端的には、彼が Georgiana Maria に呼びかけるとき、彼女をいつも“Mrs Joe”とすることである。身内ではあっても、血縁者というよりは Gargery の側の一人くらい認識なのだろう。また、Philip Pirrip の回想録という体裁を取っているこの小説中で、終盤になってようやく彼女の名前は外戚 Pumblechook により、それも訛った発音 (Georgiana M'ria) でただ一度だけ言及されるのだ (Ch.58, p.484)。彼女の癩癩は甚だしいが、自分の行く末を案じてくれた姉らしい心を思いやってみることは彼にはできないのだ。

名前の件では、彼の通称 Pip にも彼の肉親への情の薄さを見ることができる。正式名 Philip Pirrip は、彼らの父親と同じものである。語り手 Pirrip はこの通称の経緯を冒頭でこのように述べている。“My father's family name being Pirrip, and my christian name Philip, my infant tongue could make of both names nothing longer or more explicit than Pip. So I called myself Pip, and came to be called Pip.” (Ch.1, p.35) また Joe もこのように説明する。“it [Pip] is kind of a family name what he gave himself when a infant, and is called by.” (Ch.10, p.105) そして、ロンドンで友人 Herbert が Philip という名前はあまり好きではないから、と Handel という呼び名 (鍛冶屋育ちであることに由来する) を提案するとあっさり受け入れる (Chapter 22)。このように、自分の素性や、本来の帰属を示す名を変形するところには、彼の家族からの離脱願望が現れていると考えられる。皮肉や癩癩という外部的要因だけでなく、Pip 自身が生まれつき持っている性質、内部的要因としての孤児であろうとする意識の現れである。元来の生命力の強さと呼応して、理不尽に責め立てる肉親から離れ、別の場所で別の生活を送ろうという考え⁵が、彼の心の中に根付いていくのだ。

III

Biddy との関係、そして “報い” について述べたい。彼女の Pip に対する役割には2つあり、一つは彼女本来の資質による teacher / mentor というもの、そして2つ目には Georgiana Maria との心情の融合化による疑似的な姉としての立場である。

Biddy は Pip と同じ村の娘で、彼より4、5歳年長と察せられる。村の夜間学校を開いていた老女の孫で、Pip は Estella に自分の無知を罵倒されてから、Biddy に勉強を教わるようになる。Joe の徒弟となつてから、Pip は Estella への強い憧れや、それゆえに鍛冶屋業を厭わしく思っていること、もっと高い身分になりたいことを、Biddy には包み隠さず話す。Biddy は適切な意見、反論を述べるが、口調はとても静かで、判断は Pip に任せるものである。

‘Do you want to be a gentleman, to spite her [Estella] or to gain over her? . . . Because, if it [to become a gentleman] is to spite her . . . I should think -- but you know best -- that might be better and more independently done by caring nothing of her words. And if it is to gain her over, I should think -- but you know best -- she was not worth gaining over.’ (Ch.17, p.156)

彼女は Pip の自我の強さ、また度量の狭さをよく知っているのである。正当なことを意見したところで聞き入れるような利口さ、素直さは彼にはない。また、彼女は彼の身近な人々へ対する優越意識、そこからの離脱願望もよく察知しており、そのために生じる Pip のとんでもない将来の顛末を見透かしている。彼女が最も我慢ならなかったのは、Pip の Joe に対する侮蔑である。Biddy は小説中、ただ一人 Joe を高く評価する登場人物である。Pip は Joe について話すとき、露骨なまでに snobbism や無能ぶりを呈している。Biddy は Pip の行く末の見当はついていて、強くたしなめることなどせず、むしろ嫌悪感から彼と距離を取っているのである。次ぎに挙げるのは、Pip がロンドンに出立する直前のものである。

‘Have you never considered that he [Joe] may be proud?’
 ‘Proud?’ I repeated, with disdainful emphasis.
 ‘Oh! there are many kinds of pride . . . pride is not one kind . . . He may be too proud to let any one take him out of a place that he is competent to full, and fills well and with respect.’ (Ch.19, p.175 - 6)

また、次ぎの Georgiana Maria の葬式の日の場面では、肩を落としている Joe を見て、度々鍛冶場にやって来ようと言いつ出したときの Biddy の反応である。“Are you quite sure, then, you WILL come to see him often?” (Ch.35, p.303) これに対して Pip は “a very bad side of human nature” (Ch.35, p.303) と、自分の snobbery の方に相応しい言葉を返す。

Georgiana Maria との心情の融合化について論じたい。Georgiana Maria が何物かに頭部を殴打され、植物状態になったあと、Biddy は Gargery の家の家事や彼女の看護をするた

めに彼らと同居することになる。Pip と Joe が全く理解できずに困っていた Georgiana Maria の石板に書く絵文字や身振りをすぐによく理解してしまったのが Biddy だった。頭に異常を来してから、Georgiana Maria の気性の方はむしろましになり、辛抱強くなった。死を迎えるころには、とても素直になっている。温和で誠実な Biddy に世話をされるうちに、頑なになっていた Georgiana Maria の心も和らげられたと考えられる。これは、Biddy から Georgiana Maria への作用、融合化である。一方で、Georgiana Maria から Biddy への作用もある。Pip が理解できずに困っていた絵文字は、Biddy が解説して Orlick という Joe に雇われていた渡り職人を指していることが判る。Georgiana Maria は殴打事件の前日に彼と大口論になるのだが、今回は彼に許しを乞うような態度を見せる。だが実際には、小説の終盤で犯人がこの Orlick であることが彼自身の口により明らかになる。Orlick は Pip の alter ego⁶ で、彼の性格の暗い、悪の面を示していると見なされる人物である。例の鈍器は脱獄囚 [Magwitch] に指示されるまま、Pip が鍛冶場から盗み出したやすりだった。Georgiana Maria は正気ではない頭で、Orlick を通して Pip への不当を謝っていると見られる。そして、彼女の内面の Pip に対する無意識の恐怖心、警戒心が Biddy に引き継がれたと言えるだろう。彼女らは、Pip が身内に対して抱き続けている憤怒、臆病な上っ面を装いながらも自分を押さえ込もうとする相手には致命的な一撃を与える非情さを感知するのだ。先に述べた、嫌悪感ゆえ Pip を避けるのと同時に、危険人物としての彼から身を守るため、Biddy は Pip を遠巻きに見るようになる。

Pip は遺産相続見込みのしがない夢からようやく醒めると、David Copperfield が Agnes (*David Copperfield*, 1849 - 50) を思い出すように、Pip は Biddy へ帰ろうとする。しかし、その日、彼女は Joe と結婚式を挙げている。心情的な融合ののちに、Biddy は事実上も Second Mrs Joe となるのだ。Joe が後添いを迎えたことは、Pip にとって本当に鍛冶場とは縁を切らなければならない決定的な事実となる。妻の実弟であればこそ、Pip は疑いもなく鍛冶場の一員であった。しかし後添いが来たからには彼がそこに繋ぎ留められておくべき義理はないのである。鍛冶場で Joe とともに静かな暮らしをしたいと願いがあろうとも、彼はそこには居られないのだ。パトロン⁷の財産没収後、無一文になった Pip が頼みにできたのは、元々は自分が秘密の出資者になって設立にこぎつけた、友人 Herbert が共同経営者の一人となっている商会だった。Pip はこの商会の東洋の支店に雇われ、Herbert 夫婦の家に同居することになる。つまりこれは、“Psychologically, his alienation points him toward permanent exile”⁷、と Curt Hartog は述べている。

Joe と実姉からなる家族を離反した罪が、このような形で Pip を完全に元の家族から締め出した。そしてその決定的な一撃は、結果として姉との確執を継承し、また一方では自分の妻にしたいと願った Biddy の結婚だった。このような形で、Pip は忘恩の罪の報いを受けることになる。

IV

罪の償い、という観点から Pip と Estella の関係を見ていきたい。Pip の償いは離れ離れになっていた Estella、Magwitch、Molly からなる3人の親子を復活させたことである。といっても、この修復は Pip の胸のうちでのみ起こったことである。都会の場末の貧困、犯罪、汚辱にまみれた3人の過去は、どの一人にとっても触れられない方がよいものである。

Pip の内部でのみ起こったこの一連の作業を通して、彼は我欲を排して他人を思いやることを知ったと言えるだろう。

他人を思いやる心、これを Pip に気づかせたのは Magwitch、Molly が Estella にたいしてもった親としての子供への愛情だろう。両親との思い出はなく、Joe を除けば幼少期に可愛がってくれた人のいない Pip にとって、いわば基本とも言えるこの種の愛情を知らぬことは無理からぬことである。Hartog によれば、彼には実母の不在のために自己犠牲のモデルがなかった⁸という。このような体験、記憶の欠如が彼の性格の冷淡な一面を作り出したとも考えられる。

監獄船を脱走した Magwitch が湿地帯の村の墓地で出会った当時7歳の Pip に、一面では恨みを晴らす道具としながらも、自分の力で金銭的には不自由のない身分にしてやろうと誓ったのは、Pip がまず自分の娘を思い起こさせたからである (Chapter 50)。娘は自分がきっかけになった事件で、妻の手で殺されたものと信じていた。

殺人を犯した Molly は気が動転しているときに、弁護士 Jagers から子供と別れるように説得される。“Part with the child, unless it should be necessary to produce it to clear you, and it shall be produced. Give the child into my hands, and I will do my best to bring you off. If you are saved, your child is saved too; if you are lost, your child is still saved.” (Ch.51, p.425) 自分の人生はこれで終わるかもしれないが、子供は助かる、この言葉にすがったのだ。あながち誤った選択ではなかったろう。このまま自分の手元に置いて、自分と同様、あるいはそれ以上に悲惨な人生しか待っていなかったことは容易に想像できる。離れることで、また離れていても相手を深く思いやることはできる、それは寂しさ、悲しさを堪えることで成り立つものであり、最終章の Estella との別れへの伏線にもなっている。

Estella にたいする Pip の思いだけは、終始一貫して我欲、利己心のないものであった。Havisham の財産などとも無関係で存在していたのであり、彼は Havisham に向かってこう明言する。“I should have loved her under any circumstances.” (Ch.49, p.411) この気持ちはあまりに純粋なものであったから、男女の愛とは性質の異なるのもであったと言えよう。次の引用はそれを集約的に表した Pip の台詞である。

‘You are part of my existence, part of myself. You have been in every line I have ever read, since I first came here . . . You have been in every prospect I have ever seen since -- on the river, on the sails of the ships, on the marshes, in the clouds, in the light, in the darkness, in the wind, in the woods, in the sea, in the streets. You have been the embodiment of every graceful fancy that my mind has ever become acquainted with . . . Estella, to the last hour of my life, you cannot choose but remain part of my character, part of the little good in me, part of the evil.’ (Ch.44, p.378)

同じ場面で、Estella は Pip を “visionary boy” (Ch.44, p.377) と呼ぶが、的を得ている。つまり、それまで Pip は vision の中で生きていたようなものなのだ。幼少年期の現実否定癖、出世欲から始まり、単なる偶然によって錯覚を起こし、現実を見ようとせず、勝手な

未来像を作っていただけなのである。この vision の世界は Pip の言葉で表せば 'poor labyrinth (Ch.29, p.253)、もしくは 'poor dreams' (Ch.51, p.423) である。この labyrinth は真のパトロン Magwitch が姿を現すことで崩壊する。崩壊する中で、Pip は 3 人の親子関係という現実を突き止めるのだが、彼の Estella を見る目にも変化が生じる。Carolyn Brown はこれを、"Pip's search for Estella's true identity, as daughter of the Magwitches, as well as the adopted daughter of the phantom bride [Havisham], can be seen as a displaced search for his own identity"⁹、ととらえている。

子供時代から、Pip は Estella が非常に美しいというだけで、さんざん罵詈雑言、侮蔑、横暴を受けようと一心に憧れ恋いし続けてきた。それは Pirrip が思い返すように、あらゆるものに反したものである。'I loved her against reason, against promise, against peace, against hope, against happiness, against all discouragement that could be,'(Ch.29, pp.253 - 4) で、彼の彼女にたいする台詞と同様、熱に浮かされたものである。現実無視は、若い Pip の特徴の一つであるが、Estella との関係で見れば虚像としての彼女に恋い慕っていただけである。自分が見つめている Estella に何か奇妙な空気が漂うことを、にわか紳士となった Pip は薄々と感じる (Ch.29, p.259)。しかし、それが何か判らぬまま、5 年の月日が流れる。labyrinth が崩れる最初の段階として、Magwitch と再会し、そして Molly と遭遇することで、Pip は彼女の真実の生い立ちを知る。Pip の気持ちは盲目的な恋や憧れとは次元の異なるものへと昇華され、彼女以上に彼女の実像を理解することに繋がった。¹⁰

実像の Estella とは、両親の不祥事による混乱の最中に、母の弁護人によって大金持ちの Havisham に引き取られ、その養母の気まぐれな復習という魂胆によって "to wreak revenge on all the male sex" (Ch.22, p.200) という目的のため "I [Havisham] gradually did worse, and with my praises, and with my jewels, and with my teachings, and this figure of myself before her, a warning to back and point my lessons, I stole her heart away and put ice in its place." (Ch.49, p.412)、という育て方をされた。つまり性格的な素の部分の確立されない 2、3 歳のうちに、精神を奇形児化されたのだ。この奇形児の産物が彼女の特性である冷淡さ、高慢さ、自分を養母の傀儡として見なし、いくぶん投げやりに振る舞う点である。Havisham に恨みの感情を起こさせた男は Compeyson といい、Estella にとっては実父の Magwitch をも二度に渡って計略にかけた者でもあった。素性にしろ、養育法にしろ、Estella の引きずる不幸は全て親権者のふがいなさに原因があり、不可避的に彼女自身に波及している。それが、誇らしげに輝く 20 歳前後の彼女の姿に影となって現れる。この影も、Pip ほど純粋な意味で愛していた者だからこそ感じ取れたのだ。

純粹すぎるゆえに、Pip の感覚はたいへん鋭敏になった。それは、彼が Estella と Molly の母子関係を見いだした点に現れている。父親を当てるには Magwitch と Havisham の昔話を照らし合わせることで、Pip 以外の者にもなし得たかもしれない。だが、Molly との場合は、漂わせる雰囲気、手つき、髪の毛の具合など、余程よく知り、見つめてきた人ではないととても確信をもって断言できない点ばかりなのだ。

I looked again at those hands and eyes of the housekeeper [Molly], and thought of the inexplicable feeling that had come over me when I last walked not alone -- in the ruined garden, and through the deserted brewery. I thought how the same

feeling had come back when I saw a face looking at me, and a hand waving to me, from a stage-coach window; and how it had come back again and flashed about me like Lightning, when I had passed in a carriage -- not alone -- through a sudden glare of light in a dark street. I thought how one link of association had helped that identification in the theatre, and how such a link, wanting before, had been riveted for me now, when I had passed by a chance swift from Estella's name to the fingers with their knitting action, and the attentive eyes. And I felt absolutely certain that this woman was Estella's mother. . . . But her hands were Estella's hands, and her eyes were Estella's eyes . . . I could have been neither more sure nor less sure that my conviction was truth. (Ch.48, pp.403 - 4)

Pip のこのような真摯で純粋な愛情は Estella には consideration (“Be as considerate and good to me as you were . . .”, Ch.59, p.493) として、10年以上の月日の後に理解されるようになる。Estella の結婚による別離 (Chapter 44) の後、Magwitch の再逮捕により Pip は元の無一文状態に還る。そして 東洋に赴くのだが、Estella の方にも大きな変化が起こった。養母が死去し (Chapter 57)、一方で野卑なまでに乱暴で横柄な夫 Drummle のために結婚生活はとても悲惨なものとなる。その仕打ちはたいへんなもので、Havisham が作り上げた彼女の高慢さ、冷淡さは打ち砕かれてしまう (Chapter 59)。夫とも死別するまでの間、つらい日々の中で、彼女の奇形児性は崩れ去るのであるが、と言って彼女が素の状態に戻れるわけではない。彼女はあまりに幼いときに Havisham に手を加えられてしまったから、自分の素を知らないのである。高慢さ、あるいは自尊心までも打ち砕かれた後には、彼女の心は無の状態だと言ってよかろう。Pip は 再会した Estella の面差し、物腰を ‘what I had never seen before, was saddened softened light of the once proud eyes; what I had never felt before, was the friendly touch of the once insensible hand’ (Ch.59,p.491) と感じ、また彼女自身 ‘I have been bent and broken, but -- I hope into a better shape.’ (Ch.59, p.493) と述べている。しかし彼女の空気は、まだ何か空虚で心もとない。彼女が度々思い出していたのが、11年前の別れ際の Pip の言葉 “God bless you, God forgive you.” (Ch.44, 378) である。そのときは全く理解できずに捨て置いてしまったものが、苦汁をなめたあと、自分の足で立ち上がろうとする彼女の心の支え、すなわち consideration になっている。

Magwitch、Molly、Estella からなる親子の関係を突き止めたことから得られる益について述べたい。死に際の Magwitch に娘の存命を知らせることは、彼の心の負担を軽くできた。また、Estella にとっては、彼女には知る由もないことだが、世の中でただ一人彼女の本当の姿を知る人間が存在できたわけである。誰のためでもなく、ただ当事者たちの救いとして、Pip の存在、またこの作業の価値がある。彼自身にとって利益がないのは、これが彼の過去の非道への償いとしてもあるからだ。そして、自分にとって実質的な益のない行為を果たしているのだから、これは過去への埋め合わせ以上の価値をもつに至る。つまり、先に触れたように、Estella の再出発への手助けとなっている点だ。

second ending の解釈については、Pip と Estella が結婚するとか、あるいは、二度目の別離だとか二つに意見が分かれるが、筆者は後者の意見である。Satis House の地所を再訪

する直前、Pip は ‘for anything I knew, she was married again.’ (Ch.59, p.491) と語っている。また、Estella 自身、この晩 Satis House の跡地にやって来たのは、ここの屋敷を取り壊し、また新たに建て直す計画で、その前に今の状態を身納めておきたい (Chapter 59)、というものだった。つまり、Estella は屋敷の取り壊しに示されるように過去に終止符を打とうとしているのである。そして、Havisham の養女でもなく、Drummle の未亡人でもなく、新しい自分、もしくは本来あるべきはずであった自分として人生を歩めるような相手との生活をしよう、あるいは始めていると考えられないだろうか。

consideration は、例えば love などよりは静かで、分別のある響きを持つ言葉である。Pip が伝えたかった気持ちとは異なっていたようだ。しかし、Pip 以外の人間では Estella に consideration を与えられる者はいなかった。そして、無の状態に陥らされた彼女には、love や passion よりも遙かに穏やかで滋味のある consideration の方が必要だったのだ。また、生まれ変わった、新しい人生のパートナーとしては、彼女の過去と現在をあまりに知っている Pip はかえって相応しくなかったと思われる。Pip の償いは、離れ離れになった家族をつなぎ合わせる事、そしてその忘れ形見に puppet ととしてではない彼女本来の人生やその土台となる家族を誕生させることで贖われたと考えられる。

V

このように、Pip は忘恩の罪を埋め合わせたのだが、半生を回想している Pirrip には自分の家族を持っている気配は全くない。第59章で、Pip は Joe と Biddy の息子 Pip Gargery を、いつか自分の手元に渡してくれるよう頼んでいる。Pip、あるいは語り手 Pirrip にとって、Biddy と同じぐらい家庭を想起させる女性はおらず、また Estella に対するのと同じぐらい真摯で純粋な愛情を寄せられる女性も現れるはずがなかったこと、この二人の後ろで沈んで行かなくてはならないことは、彼にとっては甘受せねばならないことだったからかもしれない。家族への非道という点であるが、回想の時点でさえ、Pirrip が実姉への sympathy を一切有していないこと、また Estella が Pip の気持ちを彼が意図したのとは別の意味合いで受け止めていたことなど、埋め合わせても埋め合わせても足りない、因果応報の体を示しているようだ。

註

- 1 Curt Hartog, “The Rape of Miss Havisham”, *Studies in the Novel*, I (1992); Hartog says that ‘Mrs Joe . . . denies Pip food, love, and a sense of belonging to a family’ (p. 249).
- 2 テキストは Angus Calder, ed., *Great Expectations* (London: Penguin Classics, 1985) を使用。括弧内に章とページを示す。
- 3 Jack P. Rawlins, “Great Expectations: Dickens and the Betrayal of the Child”, *SEL*, 23 (1983): 676.
- 4 滝裕子『ディケンズの人物たち』(槐書房, 1982), pp.150 - 3.
- 5 Keith Selby, *How to Study a Charles Dickens Novel* (London : Macmillan, 1989),

Selby discusses that 'not only does he [Pip] possess nothing . . . but he also has no status in the world, because he is wholly alienated from it. He has no place anywhere, and is nobody. We could safely project from this that much of the novel will have to do with Pip trying to become somebody, trying to discover who he is. The only way in which he can do this . . . is building relationship with other people.' (p.36)

- 6 Julian Moynahan, "The Hero's Guilt -- The Case of *Great Expectations* (Source: *Essays in Criticism*, 10 (1969), pp.60 - 70)" *Casebook Series Dickens*, ed. Norman Page, (London: Macmillan, 1979, pp.103 - 118) p.109.
- 7 Hartog, p.253.
- 8 Hartog, p.254.
- 9 Carolyn Brown, "'Great Expectations': Masculinity and Modernity", *Essays and Studies*, 40 (1987): 71.
- 10 Stanley Friedman, "Estella's Parentage and Pip's Persistence: The Outcome of *Great Expectations*", *Studies in the Novel*, IV (1987); Friedman discusses that 'The discovery of Estella's parentage lifts Pip from despair, reawakens his hope, and creates in him' (p. 419). However, he views that the revised ending vaguely shows their union.
- 11 Friedman, p.413; Drummle's death is caused by his ill-treatment of a horse (Ch. 59, p.491). Friedman examines that 'we may associate her [Estella] with horse, despite our not knowing the animal's gender, for both Estella and the horse are harshly treated by Drummle, and the prior image of "mounting" may carry sexual connotations. Just as Tolstoy, over a decade later, was to use Vronsky's mare, a creature ridden to death, to symbolize Anna Karenina (Part II, ch.XXV), so Dickens is perhaps suggesting that Estella, daughter of physically violent parents, may in some vague way be responsible for Drummle's destruction, thereby revenging Miss Havisham on a surrogate for her betrayer' (p.413). Namely, it can be seen that Drummle's death is caused by Estella's hidden intention. Therefore it seems to suggest that her starting her life anew is from her own positive action, not a mere accident.

[平成7年(1995年)10月30日受理]

